
魂のもとめるもの

山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂のもとするもの

【Nコード】

N7932N

【作者名】

山子

【あらすじ】

対人恐怖症。

大丈夫なのは義弟と親友だけ。

高校に入学してみたものの――――――。

偏愛&異常愛と青春の物語。高校入門編。

運命の出会い（前書き）

プロローグ

11歳の時、魂の片割れに出逢えた。

凍えていた心が歓喜に奮えた。

無条件の安心感。

安心して安心して安心して…涙が出た。

そして、15の春。

今度は運命と————出逢う。

運命の出会い

旭日高校に入学して1週間。

未だどことなく余所余所しい雰囲気醸している教室で、担任となつた女性教諭が声を張り上げる。

「部活動は、内申に有利に働くから、進学する気のある人は入っておくことー!」

先程まで体育館で2、3年による部活説明会が開かれていた。

決められた時間内に新入生たちの興味を惹こうとアレヤコレヤと滑稽なほど熱が入つたものだった。

部活動の入部募集期間は、後、2週間弱と言つた所だろうか。

「瑞穂ちゃんは何か部活に入る?」

ツンツンと背を突くのは幼馴染みの時田安奈^{ときだあんな}。クルクルとウェーブがかかったショートボブとクリクリの大きな瞳の美少女だ。

片や、瑞穂と呼ばれた少女は瞳を隠す程の前髪に肩甲骨まで無造作に伸ばされた黒髪。フルネームは海棠瑞穂^{かいどうみずほ}という。

瑞穂はフルフルと頭を一瞬振りかけたが、ピクリと動きを止めた。

「・・・お父さんが進学も考えなさいって」

とても小さな声だった。

注意して聞いていなければ聞き取れなかっただろうが、安奈は慣れたものでしっかりと聞き取っていた。伊達に幼馴染みではない。

「おじさんが？進学するの？」

「分かんない。けど・・・」

「うーん。ま、3年も猶予があるんだから、とりあえずって考えもあるんだし、試しに入っておくってのも良い選択だと思うよ」

「うん。分かってる：約束したし：」

「うんうん。ゆっくり頑張ろうね」

瑞穂はコクンと頷いた。スカートの上で握り締めた手は汗ばんでいたし、その声は小さく震えていたが、その意思は強い。。

その様子に安奈は瑞穂の頭を優しく撫でた。

「あんだけ数があるんだし、部費欲しさに幽霊部員募集してるところだっただけあるよ。無理に活動しなくてもいいけど、参加したくなるような部活を探してみよう、ね！」

安奈はいつも優しい。駄目な自分をいつも大きな気持ちで助けてくれる。彼女の申し出に瑞穂は少しでも頑張りたいと思う。

高校生になった。ずっとこのままで良いはずはない。ほんの少しずつでもいい、自分のペースがどんなに遅くても確実に前に進んでいると感じてくれる大切な人たちがいる限り頑張ろうと思う。

――運命まであともう少し。

運命の出会い2

部活棟の入り口にある掲示板に貼られた簡単に書かれた部活紹介の紙を眺める。

因みにここは、文化部の部活棟である。

運動部の部室には用事はないし、文化部の部活と違い簡素なプレハブハウスだったりする。

その点、こちらの棟は元々、校舎だった事もありしっかりした建物だ。

棟内は微かな人の気配が蠢いている。

誰もそばにいないのに感じる気配が居心地が悪く感じてならない。

瑞穂は小さな体を更に小さくして安奈の後ろにピタリと寄り添った。

「人数は最低限で：女の子だけの部が良いね」

「出来れば、活動日数が少ないのがいい」

唇に指を当てて考える仕草は美少女そのものである。

パチンと掲示板に貼られた1枚の紙を指で弾いた。

「これは？」

茶道部。部員数21名。

「人数多くない？」

「じゃあ、これ？」

手芸部。部員数8名。

「男子生徒大歓迎って書いてる…」

「あ、ホントだ・・・あ、私と同じところに入る？」

「どこ？」

「お料理クラブ：ちなみに男女合わせて部員数は27名。週3の活動なんだって」

「うう」

「だよー。んーどうしょっかー」

「君たち新人生？」

瑞穂たちの会話に入り込んできた声。背後から伸びてきた太い腕が無防備になっていた瑞穂の肩を捉えた。

ビクリッと震えた。

「俺たち、パソ部なんだけど入らない？ 簿記とかも習うし就職に役立つよ」

「ちよっと！」

慌てて安奈が瑞穂の肩に手を置いていたのを振り払ったが、見開かれた瑞穂の瞳の焦点が合わなくなつて小刻みに揺れ出していた。軽くなつたはずの肩が重い。

全身の毛穴から一気に流れ出す汗が冷たい。呼吸が出来ない。

ハッハッハッハッハッハッハッ

くるしい…こわい…くるしい…こわい、こわいこわいッ！

瑞穂は、空気を求めて首に手を当てようとしたが、それより先に意識が混濁しはじめた。

それと同時に、昔の記憶が一気にフラッシュバックして弾ける。グラリと身体が傾く途中、安奈の悲鳴を聞いた気がした。

運命の出会い3

「やだ！瑞穂ッ！」

驚きのあまり、その場で困惑する男子生徒たちを押し退けると安奈は倒れている瑞樹の身体を抱きかかえた。

過喚起症候群。精神的な不安や緊張が原因の心身症の一種だ。

過呼吸症候群とも呼ばれ、身体の緊張が呼吸を必要以上に行わせる事により過呼吸の原因となる。

そのため必要以上の呼吸は、動脈中の二酸化酸素量が減少すると神経系や意識が酸欠状態だと誤認してしまい、それによって更に呼吸を求め↓動脈血中の二酸化炭素は減少という悪循環が生まれてしまう。

その結果、呼吸混乱や手足、唇の震え、眩暈や耳鳴りといった症状が出る。

今、瑞穂に起こっている症状も、まさにそれだ。

「瑞穂ちゃん、袋はッッ」

安奈は瑞穂の制服のポケットを探るが、求めている物が出てこない。いつも常備しているはずなのに、どうして！と焦りが増す。

焦れば焦るほど冷静さが保てず状況が悪くなっていく。

瑞穂の身体は感電したように震え、冷や汗を出し浅い呼吸が更に弱くなっている。

その顔色も青を通り越して白くなりつつあった。

「やだッ！やだ、袋、どこよ！し、しっかりして、瑞穂ちゃんッ
！」

耳鳴りが酷い。

瑞穂は薄れゆく

かなりの大声だったのだろう。

いくつかの部室から何事かというように生徒たちが顔を出していた。
それを確認した安奈は焦る心に叱咤を飛ばし声を張り上げた。

「か、紙、ビニールでも良いから袋を持っていたら貸して下さい！
早く！」

「あ…あ…は…ッ」

「み、瑞穂ちゃん！」

何人かが、安奈の言葉に慌てて部室の中に引っ込んだ。

安奈は瑞穂の身体を抱きしめた。

「あ…は…ッ…は…」

苦しさに生理的涙が溢れ出し、汗と涙でグジャグジャになった顔か
ら顔色が完全に青から白に変わった時、グイッと安奈の肩を誰かが
押し退けた。

「どいて」

低い声だった。

安奈の視界いっぱいに広がった背中が、瑞穂の背に腕を回し上半身
を軽く起こす姿勢を取らせた。そして、その手に持っていた紙で出
来た袋を口にあてる。

「ゆっくり息をしろ。焦らなくてもいい」

この時、今度は酸素不足にならないように少し隙間を空けておくといい。

朦朧とする中、瑞樹は少しひんやりした大きなものが背中に添えられて、いるのに気付いた。

気持ちが良い。

だんだんと呼吸が楽になり、耳鳴りも治まってくる。

まだ、意識は朦朧としているが、背中の心地良い感触、それに声が聞こえてきた。

運命の出会い 4

「焦るな。大丈夫、そう、ゆっくり」

顔色は白いままだが、呼吸が正常な事を確認すると袋を口から除けた。

その様子に半泣きになっていた安奈がへタリと脱力した。

「瑞穂ちゃん…よかったあ」

そして、適切な処置をした男に視線を向ける。

男子生徒だ。ネクタイの色から見て同じ1年のようだ。

しゃがんでいるが長身で細身だが、瑞穂の身体がすっぽりと治まっている。

最後に顔を見て・・・固まった。

安奈はその顔を知っていた。入学して1週間という短期間だが、女の子なら同学年のイケメンチェックは既に済んでいるであろう。安奈も嗜みとしてチェック済みである。

それに、有名なのは、それだけではないのだが・・・

男は啞然とする安奈を無視する形でぐったりとしている瑞穂の身体を軽々しく抱き上げた。

あまりにも鮮やかな行動に、部活棟の玄関口に1番近い部屋の中へ姿を消したのに気付くのに時間がかかった。

慌てて彼に続いて部屋に入ると男は、古びた黒い長ソファに瑞穂を下ろしているところだった。力が抜けてしまったその肢体は不安定

なはずなのに下ろす時もしっかりと安定している。

その光景は、まるで騎士が眠れる姫に恋焦がれ、その感情を隠し、ただ見守っているように見え安奈は見惚れてしまった。顔が熱く感じる。

「おい」

「はいはい」

男が衝立の奥に声をかけると間延びした声が答えた。

ひょいと顔を覗かせのは、男と全く瓜二つの顔だったのだ。軽い足取りで、近づいて来たかと思うと両手に握っていたホクホクと湯気の上がるタオルを同じ顔をした男に手渡した。

「2つで足りる？」

「とりあえずは」

男がソファの傍らに膝を付いて瑞穂の顔を覗く。タオルを手渡した男も一緒に。

前髪が汗で張り付いていて瞳が見えない。男は無言で瞳を隠す前髪をそっと指で拭うとあまり広くない額と閉じられた瞼が現れる。指を更に動かし瞼をなぞるととプルルと瞼が痙攣し、閉じられているが意識はあるのだと知らしてくれた。

そして、固く絞られたタオルを解すと額、頬、首と流れ落ちる汗を拭う作業に移ろうとした。

「熱かったらごめんね」

「汗で気持ち悪いよりマシだろ、我慢しろ」

「優しくねー、桜都^{おと}」

「黙れ」

低い声。似てる声が左右から聞こえる。

自分とは違う異性を感じるといつも全身が冷えて意識が遠のくはずなのに、今はとても心地が良い。顔を滑るタオルの暖かさも加えると眠りの世界へと旅たってしまいたくなる。

だけど、眠りたくない。

恐る恐ると瞼を開けてみる。

暗闇だった視界に光が突然届き目が眩む。その不快感に顔が自然と顰まるが止められない。

「ん・・・」

何度か瞬いていると目の焦点徐々に合ってくる。目線の先に自分を覗き込む2つの顔があった。

「・・・あ・・・」

「ッ！瑞穂ちゃん、大丈夫、も、息は苦しくない？」

瑞穂が目を開けたのに気付いた安奈は呆然として見つめてしまっていた男たちを押し退けるように歩み寄った。

視界が今度は安奈に変わり、あまりにも泣きそうな表情だったので、自分がまた迷惑をかけたのだと落ち込んだ。

運命の出会い5

「ごめんね」

「うん。私こそ、ごめんね。ちゃんと守るように言われてたのに」

「それこそ違う。ちゃんと治れない私が悪いの」

「もう！また自分を悪く言う！」

「はいはい。俺たちも仲間に入れてもらえると嬉しいんだけど？」

2人の言い合いに軽い口調が割り込んだ。

瑞穂と安奈はピタリと口を閉じて声に振り返った先に、ニコニコと優しい微笑を浮かべる男とブッチョ面でタオルを畳む男がいた。

先程、最初に視界に飛び込んできた顔らだ。

「あ・・・」

瑞穂は小さく声を漏らし、2人を見つめる。

やはりだ。

不思議でならない。

怖くないのだ。

視線が怖くない。さっきは、肩を掴まれただけで、心の像が止まるような感覚になったのに、今は平気だ。

「瑞穂ちゃん、奥の彼が助けてくれたんだよ」

「え？」

タオルを机の上に抛^{ほう}っている男の方を見た。

男も瑞穂の視線に気付いたのか、ぼつちりと視線が交差する。
ん？あれれ…そこで瑞穂はニコニコと微笑む男と彼の顔の顔がそっくりなのに気付いた。

違いといえば、眼鏡のあるなしぐらいか・・・

「そっくり・・・」

瑞穂の眩きに、ニコニコと微笑む男がニヤリと表情を変えた。

「双子だからね」

「双子」

「そ。俺が兄貴、詩が楽しいと書いて詩^{うた}楽^{かつたうた}。で、こっちのが弟の桜^{おと}都ね・・・桜の都ってお前は日本の申し子かって名前だけど、そこは突っ込まないで。父親が平安好きってただけだから」

ペラペラと自己紹介をする詩楽に圧倒されるが、その低く柔らかい声が耳に心地良く、少しからかう口調に笑いさえ出てくる。

自然と口の端が上がる。

ふふと笑い声が出た。その時、自分がいまだ横たわっている事に気付き肘に力を込め上半身をノロノロと起こした。

過呼吸の後遺症が残っているようでクラリと眩暈がした。

ふわっと身体が傾きそうになるが、冷たい手がそれを支えてくれる。

「あ…」

「いきなり起き上がるな」

桜都だ。

眩暈が治まると、瑞穂は改めて自分を支えてくれている男を見た。
あえて染めたのかと尋ねたくなるような真っ黒で襟足の少々長い髪。

二重で切れ長の瞳。鼻筋の通った鼻と薄い唇。ノンフレームの眼鏡が大人しめの印象を与えているが、眼鏡の奥の瞳の眼力が強い。少々色白で彫刻のような肌、少年特有の身体つきをしているが、誰が見ても良い男と分類するだろう。

詩楽も眼鏡をかけていない事と栗色に染められている髪以外は本当にそっくりだ。

「ありがとう」

しっかりと身体を起こした瑞穂はちょこんと頭を下げた。

そして、しっかりと双子たちを見つめる。その様子に、安奈は息を呑んだ。

瑞穂と出会って4年も経つが異性の目を見て話すところを見るのは彼女の父親と弟以外初めての事だったからだ。

瑞穂自身も不思議でならない。眼光鋭く人を圧倒させる雰囲気を出しているのに恐怖心は沸いてこず、寧ろ、もっと見ていたい気にさせる双子だ。

「で、お名前なーに？」

瑞穂は詩楽に顔を覗き込まれ、あまりにも近過ぎる事に慣れず、やや引き気味に慄いた。

詩楽は気にする様子も泣く「ん？」と瑞穂を促す。

「私・・・」

「んー」
かいどうみずほ
「海棠瑞穂」

これが、双子と瑞穂の初めての邂逅であった。

運命の出会い6

「瑞穂ちゃんっていうだね。んで、そっちのあんたは？」

今度は安奈に顔を向けるが、なんとなくお座なりな感じがしなくもない。

なぜなのか？と、むむむと頭を傾げてしまいそうになるが、今はどうでも良い。

どうでも良くないのは、桜都と詩楽が瑞穂の両隣へと腰を下ろしているってところだ。

こんなに体格の違う異性に挟まれていて正常な意識を保っているのに驚く限りだ。

しかも、左右に座るもんだから左に右にと顔を動かして首が疲れそうである。客観的に見てちょっと可愛い。

「私は時田安奈^{ときだあんな}。ちょっと、パニックになってたから助かったよ、ありがとう」

「あ、ありがとう！勝田くん？」

安奈が頭を下げたので瑞穂も慌てて頭を下げる。

自分の事なのに、安奈に頭を下げさせてから気付くとは情けない限りである。恥ずかしくて死にそうだ。

瑞穂は先程とは違う汗が額に浮かぶのが分かった。

「桜都」

「え？」

「どっちがどっちか分からないからね、俺の事も詩楽って呼んでね」

「え、え、え…？」

「ほらほら、呼んでみて。うーた」

ずいっと顔を近付けられ、あまりの近さに身体が自然に下がってしまい、桜都にぶつかってしまい、身体がピクンと跳ねた。

だけど、詩楽は笑顔のまま、もっと顔を近付けてくるものだから、更に桜都に身体を押し付ける形になり自身の身体が熱くなるのを感じた。

そのやり取りを見て安奈は、奇跡だ…と感動を覚えずにはいけない。胸が熱くなる。

瑞穂はいたたまれない状況から脱出したいがために、決死の思いで口を開いた。

「う、ううううた？」

どもった感じが可愛い。

「はい、次は・・・」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

アタフタと困惑する瑞穂の前方にいた安奈の方から流行の音楽がけたたましく鳴り響いた。

突然鳴り出した音楽に3人は安奈に視線を向ける。

携帯着信音だ。瑞穂はそれが誰の専用音楽か知っていた。

ゴソゴソと制服のポケットから携帯を取り出した安奈は、こちらに手を上げながら携帯を受けた。

「もしもし?…ああ、まだ学校。ちょっと問題発生。あれ、起こしちゃって・・・わ!いきなり大声出さないでよ!大丈夫だよ。今?部活棟の入り口に1番近い部屋にいる・・・待って、落ち着け。分かったから、代わる代わる」

安奈は耳から携帯電話を離し、ため息をつくと瑞穂に視線を送る。苦笑を洩らして、それを手渡してきた。

「心配性のバカから」

「瑞穂?」

「そ、声を聞かせて安心させてやって」

「うん」

瑞穂は携帯を耳に当て、恐る恐る声をかけた。

「もしもし…?」

『苦しくない?』

「大丈夫だよ」

『今から迎えに行くから一緒に帰ろ』

「うん、待ってる」

『後から、色々聞かせてもらうからな』

「わ、分かった。切るよ」

電話を切り、安奈に携帯を返そうと手を伸ばした時、背後の仕切りの奥から、ピーー、という音が鳴り始めた。

桜都が無言で立ち上がると、仕切りの裏に姿を消す。鳴っていた音が止まり、かわりにシュワワという音と湯気が仕切りの裏から立ち上がってきた。

どうやら、お湯を沸かしていたらしい。

瑞穂は安奈と顔を見回せ、同時に首を傾げた。

桜都は何をしているのか？聞こえていた音がシュワワから変わり、今度はカチャカチャという陶器がぶつかり合うような音が聞こえ出し、「なんの音？」とますます首を傾げずにはいられなかった。

## 運命の出会い7

カチャカチャという音が聞こえなくなると、桜都が両手になにやら持って現れた。

お盆の上に可愛らしい花柄の陶器のポットに同じ種類のカップが4客・・・桜都が衝立の裏でゴソゴソ動いたいたのは飲み物を用意していたからのようだ。

桜都は、それらを机に置くと紅茶をカップに注ぎ出した。

黄金の液体が甘く香ばしい香りを放ちながらカップに流れていく。

瑞穂はそれを感じたように眺めていると反対側に座っていた詩楽が話しかけてきた。

「紅茶好き？」

「え」

「ここ、紅茶娯楽クラブ。顧問の趣味丸出しで種類だけは豊富だし、美味しい紅茶飲み放題なんだよ。んで、紅茶は好き？」

「好き」

瑞穂は素直に頷いた。実際、瑞穂は紅茶も珈琲も大好きだったのだ。カップに注がれた紅茶が自分の前に置かれる。次に安奈にも座るように促して彼女にも紅茶を渡していた。

横を向けば向けばで詩楽は既にカップに口を付けていた。

目の前には湯気を上げる紅茶。自分に用意されたのだと認識しているが、勿体ない気持ち湧き上がり手が付けられない。

だが、ずっと眺めているわけにもいかず、カップと桜都を見比べていると桜都が視線に気付いたのかこちらに目を向けてくる。

何も言わないが、その眼が「早く飲め」と物語っているのは明らか



だった。

瑞穂はその視線に負けて勿体ない気持ちを押し殺して、カップに恐る恐る口を付けた。

「わ：美味しい！」

お店で出てくるような味に思わず素が出てしまった。

しかも、おもいのほか水分を消費していたみたいで優雅さの欠片もなく一気に飲み干してしまう。

なんだか物足りない。

カップが小さいからだと思ったが、紅茶は優雅に飲むイメージがある瑞穂は、グビッと一気飲みをした自分に、どんだけ乾いてたのツ！と、なんだか恥ずかしくなってしまった。

そう思ってしまったら、どんどん羞恥心が煽られ顔が熱くなる。

瑞穂は、持っていたカップをテーブルに戻して顔を伏せて隠してみたが遅い。

美味しい発言から3人から凝視されていたのだ。

3人3人思うところがあったようだが、それはここでは語らない。

「おかわりは？」

「え」

瑞穂は声に顔を上げた。

顔を上げると桜都がポット片手に構えていた。

「・・・もっと水分補給しとけ」

「え、え」

「ほら、カップ寄越せ」

「あ、ありがとう！」

瑞穂は2杯目はゆっくり味わおうとカップを両手で持った。

「これは、アッサム？」

「ああ」

「お、瑞穂さんは紅茶に詳しい？」

「詳しくはないの。お父さんが紅茶が好きってだけで」

「おじさん、インテリだからね」

「インテリって…安奈ちゃん」

「カッコいいってこと」

## 運命の出会い 8

どこことなく会話が弾み、和やかな雰囲気の流れ始めたころ、ドアを叩く音が聞こえた。

安奈がパッと立ち上がり瑞穂にニヤリと笑って見せた。

「来たみたいだよ」

ドアを開けると、そこには安奈の予想通りの人物に満足する。走ってきたのか少し息を切らしていて顔に余裕はない。

相変わらずだな、と苦笑を洩らしつつ身体を大きく避けて部屋の中へと促した。

入ってきたのは男だった。

比較的、短くカットされた黒髪に背は高校1年生にしては高くガツチリした体躯をしている。

「汗だくだね、大丈夫って言ったでしょ？」

「姿見るまで安心できねえ」

「はいはい。お姫様はあちらだよ」

3杯目の紅茶を貰っていた瑞穂はドアにいた男に軽く手を振った。あまりにも、のほほんとした光景に男は呆氣に取られたように呟いた。

「ねーちゃん・・・」  
『ねーちゃん?』

男の呟きに、双子から疑問の声が上がる。

確かにそうだろう。瑞穂たちは入学して1週間しか経ってない1年生である。

双子ではない限り『姉』的立場になりうるはずがないのだ。

だが、この2人のどこをどう見ても似ている所はどこにもない。

瑞穂はカップをテーブルに置いて立ち上がると男、瑞樹の傍らにいきそいと歩み寄った。

「瑞樹、ごめんね」

「心配したんだぞ」

「うん。あのね、勝田くんが助けてくれたの」

「勝田・・・?」

瑞樹はそこで初めて部屋の奥にいる2人組みの男子生徒に気付いた。その人物たちに見覚えがある。でも何故?と怪訝な顔になってしまふのはしょうがないだろう。

それは、双子たちも同じだったようでお互いの頭上に?マークが飛びかっている。

最初に口を開いたのは詩楽だった。

「お2人さんは、どういった関係?」

「お前らが助けてくれたって、勝田」

「質問に答えろって」

「え、え、知り合い?」

「勝田：あー：兄?と同じクラスだぞ、俺」

「そうなの、すごい」

「凄いてなになが：瑞穂さん：で、ご関係は？」

「あのね、瑞樹は弟なの」

「弟？」

ここで初めて桜都が口を挟んだ。

「うん。親同士の再婚。しかもね、名前が似てるの！私が瑞穂で弟が瑞樹、面白いね！」

なにが？というツツコミを誰もが言いたかったはずだが、ニコニコと笑う瑞穂に何も言えない。

瑞樹は自分や安奈以外の同年代に、こんな素の笑顔を見せていることの方に驚きを隠せない。だが、今回は運が良かっただけだ。

こんな幸運、早々あるわけではない。瑞樹はハアと一息付き、ニコニコ顔の瑞穂の頭をぽんぽん叩いた。

「・・・ねーちゃんが元気そうで安心した。で、やっぱり考えたんだけど、俺、部活入るのやめるわ」

「え！駄目ッ！駄目だよっ！」

「今回は運が良かっただけ。俺が部活始めると帰りも遅くなるし、朝連も始まれば、ねーちゃん1人で登校することになるぞ。完全に治ったとは言いがたいわけだし、ねーちゃんは頑張るって言っても俺の方が心配で練習も出来ん：過保護とでもなんと言われても決めたから」

「ダメダメッッ！！瑞樹、それだけは駄目！」

瑞穂はガバッと立ち上がると瑞樹に齧り寄った。

また、自分のせいで瑞樹が犠牲になるのか。そんな事はさせない！させられない。

瑞穂は情けない自分に涙が出そうだった。

どうしたら、この発言を撤回出来るのかと瑞樹は考えた。

考えたが全然良い案が浮かんで来ない：どうしたら良いの、どうしたら・・・

焦れば焦るほど考えがこんがらがって何も出てこない。

「ここに入れば良いだろ」

突然の声に「え？」と弾かれて振り返った。

声を発したのは桜都だった。

「少人数部員、活動内容は紅茶を飲むだけ、活動時間は自由。お前の部活終わったら迎えに来たら良いし、遅くなるようなら・・・俺が送っていく」

「は？」

「朝練が始まったら、私が瑞穂ちゃんを迎えに行くし、瑞樹、大丈夫だよ。ほら、あんたの発言で瑞穂ちゃん泣きそうになってるの知ってる？」

「えっ、わ！」

自分が情けない。

今日、会ったばかりの人にも気を使ってもらって：自分1人じゃ何も出来ない。

「頑張るの。にゅ、入学前に約束した！けど、私、また周りの人に迷惑をかけちゃう・・・」

「ねーちゃん」

「迷惑？お前の決める事じゃないだろーが。何が迷惑か決めるのはこっちで、今、俺が言った事は好意で、その好意を勝手に迷惑だと解釈するな」

「それにね、瑞穂さん。今年の1年は俺たちだけみたいなんだよね。

入ってくれると嬉しいんだよ」

「嬉しい？」

「ここね、本当に顧問の趣味みたいで、部費出ないわけよ。部室はどうにか確保したみたいだけど、新しい紅茶やらお茶請けやらは実費なの。生徒から部費を回収するってどんな部活だってーのって感じなわけ。だから、瑞穂さんが入ってくれると助かるって話なんだよね」

「ちなみに部人数は俺ら入れて7人。内、名前だけの奴が3人で部費は半年に1回5千円：勿論3名は名前だけだから部費もいれない。・・・俺たちは部費をカンパしてもらえて助かる、お前は時間潰しの場所確保出来る。迷惑じゃなく利害の一致だろ」

「利害の一致？」

「そう。瑞穂、どうする？」

「は、入るッッ！」

END

おまけ

「……………ちょっと待て。何でお前らねーちゃんを名前呼びしてんだ!」

「瑞穂さんと俺ら仲良しだから」

「はあ?」

「煩い。部外者は出て行け」

「…はいはいはい。ねーちゃん帰るぞ!」

「え、え、え」

「あ、ねえねえ、ここって掛け持ち部員募集してる?」

「してるしてる。先輩の1人が掛け持ちしてっから大丈夫だよ」

「じゃあ私も入るー」

「ホント、安奈ちゃん!」

「頑張ろうね、瑞穂ちゃん!」

「うん!」





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7932n/>

---

魂のもとめるもの

2010年10月9日10時23分発行